

金沢における明治中期の剖検記録

——第四高等中学校医学部——

寺 畑 喜 朔

わが国における明治期の死体解剖に関する法令上の沿革は、明治二年八月十三日の弾正台回答に始まり、同六年十一月の太達一番外、同十年二月太布告二二号、同十三年違警罪第四二五号、同十八年七月内達甲二五号と示達されてきた。

ところで、金沢地方における解屍の始めは明治三年七月（長岡博男、石川医報・二八三号、昭36、酒井恒、日本医学雑誌・十七巻二号、昭46）とされている。以後明治十六年まで二十余人の解剖が行われた。これらの解屍の対象は全て刑死者である。石川県で最初の特志解剖は明治十六年四月二十五日の竹川りんで、この顕彰碑は現存しているが、解剖内容に関する知見は不詳である。

最近第四高等中学校医学部の「解剖一件」綴（明二十一年

二十五年）を金沢大学医学部において発見したので、その概要を報告する。同綴には七十二件の剖検手続一件書類が収められており、その筆頭は刑死者畑田五三郎（三十四年）であらかじめ死刑執行前日に医学部より金沢監獄へ死体引渡方を依頼し「明廿五日於貴署囚人死刑可有之由該死体引取人無之候ハ本部生徒解剖実験用トシテ御引渡相成度此段及御照会候也 明治廿一年四月廿四日」、処刑当日死体受領と同時に監獄は「右之者死刑執行候ニ付御請求之通り及御引渡候条領取証持参シ人夫御差向被下度且ツ実験済ノ上ハ其旨御通知相成候ハ直チニ看守立会埋葬可致候右通知旁及御照会候也 四月廿五日」を医学部に手交した。剖検は死体受領後、直ちに外表検査を終えんと薬液（内容不詳）を血管より注入し、翌日執刀（医学士山田謙治、介者飯森益太郎）、上肢（二十七日）、軀幹（二十八日）、下肢（二十九日）、顔面（三十日）の順で解剖され、五月四日埋葬された。

第二号の記録は恤救患者村井小右エ門（四十五年）で「今回御院ニ於テ治療御許可相候ニ付テハ御規則堅ク可相守ハ勿論万一不幸ニシテ死去候トキハ御見込ニヨリ剖見被下候

モ不苦候条豫テ此段御受申上候也」(御施療ニ付受書)を提出し(明21・6・29)、死去後(同年8・8)剖検に付された。剖検記録は此綴りにはないが、金沢大学医学部第一病理学教室の「病理局・剖検記事」によれば、本例が第一号として記録されており、病名は骨瘍で筆記は飯森益太郎である。執刀者は不詳。

第三号は士族栗山得定(五十七年)の特志解剖で、栗山は死去当日、つぎの解剖願を木村孝蔵医学部長宛に提出した。「自分儀不幸ニシテ不治ノ症ニ罹リ再ヒ起ツ能ハサルハ既ニ自ラ覚悟スル所ニ御座候、就テハ死後医学研究ノ為メ屍ヲ解剖シテ病理ヲ探求シ世ノ公益ニ供セラレ度何卒願意御採用相成度親戚連署ヲ以テ此段子メ奉願上置候也 明治式拾老年八月十六日」。剖検は翌十七日午前七時より医学士黒柳精一郎執刀(筆記、助教論岸千尋)により始められた。臨床並びに病理診断は肺結核である。この剖検の来観者として、親戚五名、病院医員、医学生ら二十五名が記録に記されている。先祖由緒一類附帳(金沢市立図書館蔵)によれば、栗山得定は定番御歩役を勤め、御切米高四拾俵と判明した。また、栗山得定の名は第四高等学校医学部解剖

遺躰第一合葬交名碑(金沢市卯辰山にあり。明21—同29年の解屍者百名)の筆頭者として刻まれている。栗山の剖検記録は病理局剖検記事にも同文のものが第二番目に残されている。

解剖一件綴を年度別にみると、明治二十一年十三件、同二十二年九件、二十三年二一件、二十四年二一件、二十五年八件となっており、施療患者がほとんどで特志解剖は僅か二名である。診療科別にみると、内科四五件、外科一六件、婦人科四件、不詳七件と分類できる。また、内科の内訳で最も多いのは結核で他に梅毒、腎臓病、肝臓病、神経病、腸チフスなどがあげられる。

この時代に剖検を推進した者は黒柳精一郎(後述)、山田謙治(明治二十年卒、医学士、産婦人科担当教諭のほか、解剖学、病理学、法医学を兼務した)、川瀬泰輔(明治二十年卒医学士、解剖学のほか病理学、薬理学を担当兼務した)、飯森益太郎(石川県甲種中学校卒)らである。とくに、明治二十一年四月第四高等学校医学部教諭兼内科医長の黒柳精一郎(明治十六年卒、医学士)の功績は大きい。黒柳について調査した結果、つぎの点が明らかとなった。

(1) 安政五年二月福井県に生まれる

(2) 明治十六年東京大学医学部卒業

(3) 明治十六年より同二十一年まで大分県立医学校内科教諭、大分で積極的に剖検を行っている(大分の医療史)。

(4) 明治二十四年頃より湿性肋膜炎に罹患(金沢医学会雑誌二六号)

(5) 明治二十五年三月退官、のち大坂市谷町二丁目一六二で開業、神戸花隈町へ転居(年代不詳)、明治四十年六月十日神戸で歿す。享年五十歳。

(金沢医科大学)

一八六二年(文久二年)麻疹の

大流行と長州藩

田中助一

一八六二年(文久二年)夏より秋にかけて、江戸をはじめ各地に麻疹の大流行があった。この時長州(萩)藩は、朝廷と幕府との間に公武周旋運動を熱心に行っていて、政治的に極めて重要な立場にあった。藩主毛利敬親は江戸藩邸(麻布邸)に滞在中であったが、藩主の主任侍医青木周弼が文久二年五月二十五日付で萩の弟研蔵(医家)に与えた書簡により、既に五月朔日以前より萩に麻疹が流行していたことや、江戸においても相当の流行があり、藩邸内にも感染者があったことがわかる。そして江戸藩邸内の患者は、早速先に建設せられた病院に収容したが、段々多くなり、その上藩主が公武周旋のため上京することとなっていて、その準備と一緒に五月終頃から六月初頃にかけては邸内は大混雑を呈した。